

地中海古代都市の研究 (133)

メッセネにおける劇場調査報告 2010(1) スカエナエ・フロンスの柱頭

9. 建築歴史・意匠-4. 西洋建築史 建築歴史・意匠
メッセネ 劇場 スカエナエ・フロンス 柱頭正会員 ○吉武隆一¹⁾ 伊藤重剛²⁾ 岩田千穂³⁾

1. はじめに

熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長:伊藤重剛)は、2007年よりギリシア古代都市メッセネにおいて劇場の建築学的調査をおこなっている。メッセネの劇場は、ギリシアの考古学者テメリス元教授が率いるメッセネ考古学協会が約10年間かけて発掘したもので、近年になりようやく全貌が明らかになりつつある。熊本大学の調査団は、建築調査担当として劇場の調査に取り組んでいる。本年度は、2010年8月5日から9月17日の44日間、現地にて調査をおこなった。本稿では、ローマ時代のスカエナエ・フロンスに使用されたと思われるオーダーの部材の中でも、特に柱頭について詳細に報告する。

2. スカエナエ・フロンスの柱頭

劇場およびその周囲から発見された柱頭の部材は、全体の形が分かるもので、全部で19個あった。柱頭は3種類あり、コリント式、イオニア式、ロータス・アカンサス式である。

2-1. コリント式柱頭

全体が残っているコリント式柱頭は、劇場で2つ発掘され、2007年秋まで現地博物館に保管されていた(部材番号808、T12)。この2つの柱頭は、寸法やこまかな装飾がきわめてよく似ていて、ニッチに立つペアの柱の柱頭として作られた可能性が非常に高い。これ以外にも、アカンサスの葉が二段ついている破片が見つかったので、他にもコリント式柱頭があったと考えるべきである。しかし、見つかった破片はあまり大きくないため、破片のコリント式柱頭と、現在見つかったコリント式柱頭とが全く同じ形態のコリント式柱頭かどうかは、はっきりしない。

コリント式柱頭(図1、2)は、8枚のアカンサスの葉が2段ある。立面の中央に大きなアカンサスの葉が位置する。小さなアカンサスの葉の間から、筋のあるカリキュラスがまっすぐに伸び、カリクスから2枚1対のアカンサスの葉がある。カリクスから、外側と内側の2方向にツルが飛び出している。内側のツルは、立面の中央部分に到達し、反対側のツルと左右対称に、二つの内渦巻きを作っている。外側のツルは、アバクスに沿って平面で斜め45度方向に飛び出し、隣の立面から伸びるもう一つのツルと共に外渦巻きを形作る。カリクスの上にあるアカンサスの葉は大きく発達していて、内渦巻きが高く押し上げられた格好になっている。そのため、内渦巻きの上側にある花卉装飾もアバクスに押し上げられて

いる。

アバクスは、上面から見て斜め45度方向に伸び、先が尖っている。外渦巻きの大きさは、柱頭に比べるとそれほど大きくないが、渦が柱頭の中心軸から外側に大きく飛び出していて、華麗な印象を与えている。柱頭上面には、ダボや鋸の痕跡は全くない。またドリス式やコリント式柱頭によく見られる上面の膨らみもみられない。

このコリント式柱頭はカラトスが太く、その周りにアカンサスの葉や渦を取り付けている。そのため、アカンサスの葉などの装飾を大きく作らなくとも、豪華な印象を与えている。カリキュラスは小さなアカンサスの葉の上のり、下から上までほぼまっすぐに伸びている。すなわち、一段目のアカンサスの葉の軸からカリクスまで、まっすぐの軸線になるように作られている。全体的には、ヘレニズム時代のコリント式柱頭よりもカラトスが太く、アカンサスの葉が鋭くとがり、外渦巻きは大きく飛び出して、壮麗な印象を与えている。

部材の実測値から計算すると、柱頭高さは平均0.567mm、アバクスの幅は平均0.630mm、アバクス高さは平均0.087mm、底面直径は平均約0.400mmであった。柱頭は一見大きく見えるが、底面の直径は約40cmと意外に小さい。

2-2. イオニア式柱頭

イオニア式柱頭は全部で5つ確認できた。メッセネのイオニア式柱頭は2種類の柱頭があり、一つは渦巻きが水平に飛出し、正面と側面では全く異なる形になる通常のイオニア式柱頭(部材番号1912)と、4つの渦巻きが平面で斜め方向に飛出し、四つの側面のいずれからから見ても2つの渦巻きがあるもの(部材番号1423、1910、1911、1912)とがある。

2-2-1. 水平に渦があるイオニア式柱頭

水平に渦があるイオニア式柱頭(図3、4)は、1つだけ発見された(部材番号1912)。この柱頭は、劇場で発見された建築部材では最もきめが細かく、鑿やコンパスの跡がよく観察できる。上面のほぼ完全な正方形のアバクスがあり、その下に水平方向に伸びる渦がある。上面から見たアバクスは完全な正方形平面で、表面に先の細い鑿で仕上げた鑿痕が残っている。中央にはコンパスの痕があり、所々で途切れているものの、4本の円がある。また、アバクスの端には、アバクスに平行な線がはっきりと観察できる。

二つの渦巻きは、外側から内側に巻き込んでいて、丁

表1 柱頭の各部寸法

柱頭式	部材番号	高さ(復元値)	アバクス高さ	第1アーカンスの葉の高さ	アバクス幅	底面直径	タボ穴	第1アーカンス葉/柱頭高さ	備考	
	No.									
コリント式	No. 808	0.571	0.091	0.150	0.630	0.400	底面3	0.263		
	No. T12	0.562	0.083	0.153	0.630	0.400	底面3	0.272		
	平均値	0.567	0.087	0.152	0.630	0.400		0.267		
イオニア式	部材番号	高さ(復元値)	アバクス高さ	上面幅	底面直径	タボ穴	クランプ穴	アバクス高さ/柱頭高さ	備考	
	No. 1912	0.143	0.036	0.418	0.367	底面1		0.252	通常のイオニア式柱頭	
	No. 1423	0.162	0.053	0.493	0.345	底面1	上面1	0.327	斜め方向に渦がある	
	No. 1911	0.153		0.390	0.347	底面1				
	No. 1910	0.141	0.042	0.412	0.358		上面1	0.298		
	No. 11085	0.141	0.045	0.400	0.408	底面1				
	平均値	0.148	0.044	0.423	0.365					
ロータス・アカンサス式	部材番号	高さ(復元値)	アバクス高さ	第1アーカンスの葉の高さ	アバクス幅	底面直径	タボ穴	アバクス幅/柱頭高さ	備考	
	No. 1100	0.395	0.076	0.140	0.467	0.310	底面1	1.181		
	No. 1101	0.363	0.073	0.140	0.466	0.310	底面1	1.262		
	No. 1909	0.496	0.080	0.142	0.555	0.366	底面1	1.118		
	No. 102	0.460	0.083	0.158	0.552	0.370	底面1	1.200		
	平均値	0.429	0.078	0.145	0.510	0.339		1.189		
	No. 14	0.425	0.082	0.140	0.553	0.374	底面1	1.301		
	No. 1908	0.515	0.086	0.160	0.590	0.402	底面1	1.146		
	No. 1905	0.441	0.062	0.145	0.600	0.420		1.361		
	No. 1906	0.445	0.073	0.150	0.600	0.420		1.348		
	No. 971		0.088			0.593				底面が欠損
	平均値	0.457	0.076	0.149	0.587	0.404		1.286		
	No. T40		0.113			0.727				柱頭上部だけの破片



図1 コリント式柱頭 (部材番号 808)

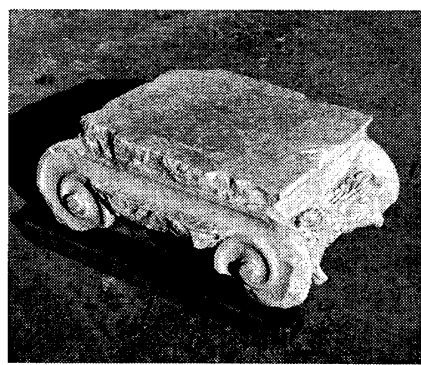


図3 通常のイオニア式柱頭 (部材番号 1912)

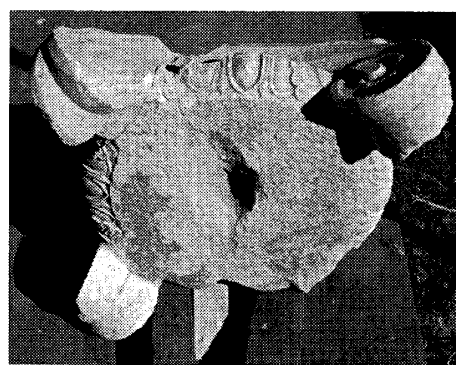


図5 斜め方向に渦があるイオニア式柱頭 (部材番号 11085)

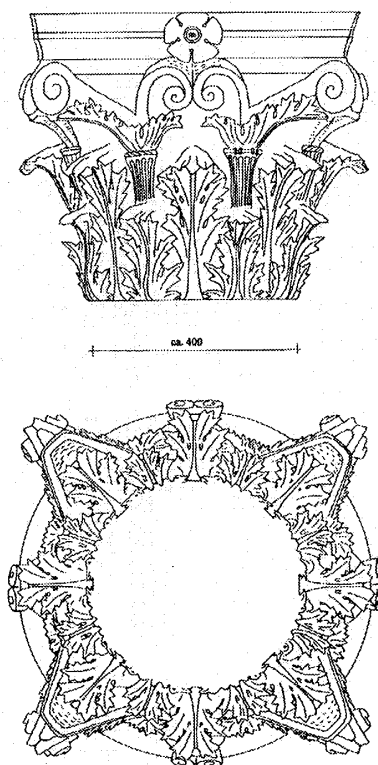


図2 コリント式柱頭 (部材番号 808)

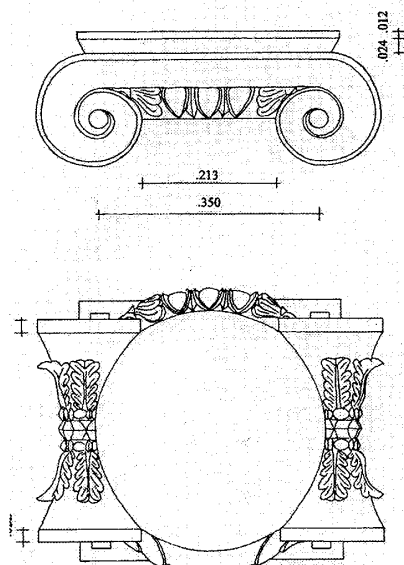


図4 通常のイオニア式柱頭 (部材番号 1912)

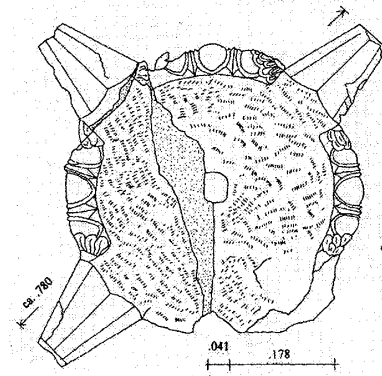
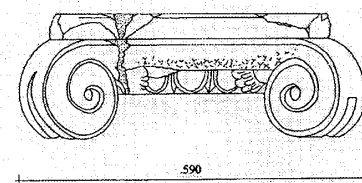


図6 斜め方向に渦があるイオニア式柱頭 (部材番号 11085)

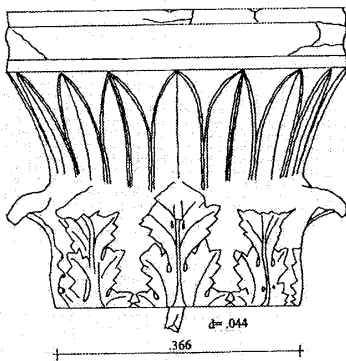


図7 ロータス・アカンサス式柱頭 (部材番号 1909)

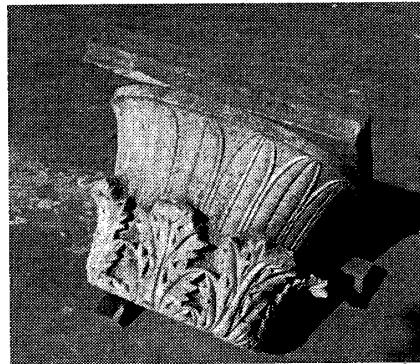
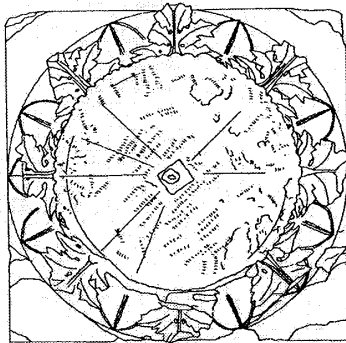


図8 ロータス・アカンサス式柱頭 (部材番号 102)

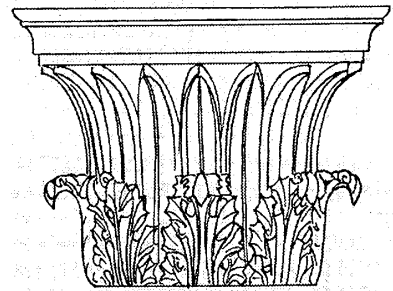


図9 アテネ、風の棟のロータス・アカンサス式柱頭

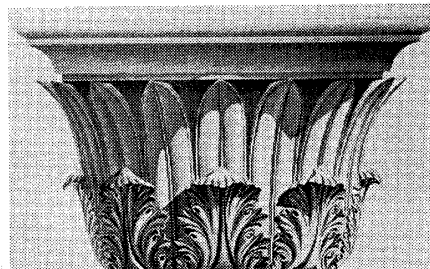


図10 アテネ、アグリッパの音楽堂のロータス・アカンサス式柱



図11 アテネ、ディオニソス劇場のロータス・アカンサス式柱

度2回転(780度)回転したところで渦の目に収縮する。渦の目から円周部までの半径は、外側から内側へなめらかに低減している。渦の目には、かすかにコンパスの痕が残っている。

二つの渦の間には、すなわちエキヌスには、卵鏃装飾(egg-and-dart)の装飾がある。エキヌスと渦巻きの間には、アングル・パルメット(angle palmette)もある。正面側のエキヌスには装飾があり、背面には装飾がない。柱頭の側面は、渦巻きの側面(pulvinar)が占めていて、中央に剣帯(baluticus)があり、その左右にアカンサスの葉の束が3組ついている。

実測の結果、柱頭の全幅0.550m、部材高さ0.220m、アバクス高さ0.036m、アバクスの大きさ0.418×0.418mであった。渦巻きの幅0.360mで渦巻きの中心の直径は0.030m、左右の渦の中心軸の心心距離は0.350mあった。

2-2-2. 斜めに渦があるイオニア式柱頭

水平に渦があるイオニア式柱頭(図5、6)は、全部で4つある。いずれの柱頭も、上面または底面から見たときに斜め45度方向に渦巻きがあるいわゆる four side Ionic capital である。

この柱頭では渦が斜めに飛び出すために、アバクスも四つの隅が外へ飛び出した形になっている。アバクス正面には円や四角だけでなく、アバクスの中心を通る対角線上にも線が刻まれており、渦巻きを作るための基準線であったと思われる。

渦巻きは、隣り合う側面から伸びるアバクスがそのまま

渦巻きに繋がっていて、斜め45度方向に突き出している。渦巻きは780度回転して、中央の中心軸に収まっている。渦の外側には、幅10~6mmの縁がついている。渦の中心部分は直径約3cmの円形に掘られており、渦巻きの面よりも少し外側に少し飛び出している。渦の中心にはコンパスの穴が残っている。

エキヌスには、卵鏃装飾の装飾があつて、卵の数は3つずつである。エキヌスと渦巻きの隙間には、アングル・パルメットがある。斜めに渦があるイオニア式柱頭のうち、完全に近い形で残っているものは1つだけあり(部材番号11085)、これをよく観察すると、4つのエキヌスのうち1つだけは装飾がないことが分かる。同様にエキヌスに装飾がない部材が他にもあり(部材番号1423、1910)、しかも装飾がないエキヌスに隣り合う渦巻き二は、渦巻きが省略されていた。このようにエキヌスや渦巻きの装飾を簡略化した面は、スカエナエ・フロンスの背面に置いたと推測される。アバクスの上面には、鏃の跡が残っている部材があり(部材番号1423、1910)、これらは付け柱に使用されたのかもしれない。しかし、先に述べた装飾の無い面と一致していないことから、再利用時に加えられたものであろう。

4つの部材の実測値はいずれも非常に似ており、平均すると部材高さ0.149m、アバクス高さ0.046m、上面幅0.424mであった。

水平に渦があるイオニア式柱頭と、斜めに渦があるイオニア式柱頭とは、平均値で若干の違いが認められるが、

他のコリント式柱頭やロータス・アカンサス式柱頭の寸法との違いに比べればわずかである。従って、2種類あるイオニア式柱頭は、共に同じ大きさの柱に使用されたと考えられる。

2-3. ロータス・アカンサス式柱頭

ロータス・アカンサス式柱頭(図7、8)は、全部で9部材確認された。大きい柱頭では高さ0.515m、小さい柱頭では高さ0.363mであり、大きさにかなりばらつきが見られる。しかし、アバクス幅と柱頭高さの比は、およそ1.1~1.3前後であり、ほぼ一定している(表1)。

ロータス・アカンサス式柱頭は、ベルを逆さまにしたようなカラトスの周りに、下段にアカンサスの葉、上段にロータスの葉がある柱頭である。上部には正方形のアバクスがのる。アバクスの上面はきれいに仕上げられているが、再利用時に作られたと思われる、膨らみがある部材も多数見つかっている(部材番号971、1908)。

アバクスの側面にはコリント式柱頭とは異なるモールディングがある。アバクスのすぐ下で、カラトスの最上部には、高さ1cm程度のフィレットがある。

アカンサスの葉は、コリント式柱頭のアカンサスの葉とよく似ている。1段に8枚のアカンサスの葉がある。アカンサスの葉は、中央に葉脈があって左右に4つずつ対称に、小さな葉のまとまりが飛び出している。彫り方は、写実的というより、簡略化してやや記号的な表現になっている。また、アカンサスの葉は、側面の中央を通る軸と一致するように配置されている。アカンサスの葉の上には、全部で16枚のロータスの葉がある。ロータスの葉も、側面の中央を通る軸と一致するように配置されている。ロータスの葉は、中央に筋があって膨らんでいる葉と、逆に中央に谷間がある葉とがある。これらの葉は、交互に並んでいて、柱頭の側面の軸には必ず中央に谷間がある葉が配置されている。

底面には中央に一つだけダボ穴が見られる。一つの柱頭には鉄のダボが残ったまま見つかった(部材番号1909)。また、底面に放射状に伸びる線が刻まれている部材もあり(部材番号1909)、ほぼ正確に円を16等分している。この線は、アカンサスの葉とロータスの葉の軸線と一致しているので、側面の葉を彫る前に、底面で位置を決定したと推測される。

一部のロータス・アカンサス式柱頭は側面が仕上げられていない部材があった(部材番号102)。見えない背面を仕上げなかったのか、あるいは付け柱に使用されたのかもしれないが、詳しくはよく分からない。

また、部材番号1100と1101、および1905と1906は、番号からも分かる通り、隣り合う場所で発掘された部材だが、寸法が極めてよく似ており、特にアバクスの幅

がほぼ同じであることから、ペアの柱頭として作られた可能性が高い。また、部材番号1905と1906は、他の柱頭と異なり、ロータスの葉が24枚ある。

ロータス・アカンサス式柱頭は、細かな装飾や寸法に違いはあっても、同時期に作られ使用されたと考えられるのが自然である。大きさがかなりばらつきがあり、次稿で述べるように復元の手がかりを柱高に得たことから、大きな柱頭と小さな柱頭の2種類があったと推定して、寸法を整理し、平均値を表1に示した。

3. 考察

劇場のスカエナエ・フロンスは、ローマ建築の趣味に従ってコリント式オーダーが使われることが多い。まれに、コリント式に加えてコンポジット式やイオニア式が組み合わせられることもある。メッセネでは、コリント式、イオニア式、ロータス・アカンサス式の3種類のオーダーが一度に使用されており、3種類のオーダーが同時に使われるスカエナエ・フロンスとしては、他に例がない。

とくにロータス・アカンサス式柱頭は、類例の少ない柱頭である¹⁾。ロータス・アカンサス式柱頭は、ローマ時代にはアテネの風の棟のポーチと(図9)、アグリッパの音楽堂のポーチに使われている(図10)。また、スカエナエ・フロンスに使われたかどうかは分からないが、ディオニソス劇場の近くからも見つかっている(図11)。このように、ロータス・アカンサス式柱頭は、おもにギリシア本土で好んで採用されており、ローマ時代のメッセネでもその影響を受けたのであろう。

謝辞 本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金「ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域の建築及び考古学的国際共同調査」(基盤(S)課題番号20226012)の助成を得た。ここに謝意を表する。

註

- 1) ロータス・アカンサス式柱頭は、ローマ時代にヘレニズムのロータス式柱頭とコリント式柱頭のアカンサスを組み合わせて作られた柱頭であろう。アバクスもコリント式柱頭のアバクスから持ち込んだものと思われる。ロータス式柱頭が最初に確認できるのは、ヘレニズム期で、ベルガモンのデメテール神域のプロピロンで初めて使用された。しかし、パーム式柱頭に比べて、あまり好んで使われることはなかった。詳しくは以下を参照。J. J. Coulon, *The Architectural Development of the Greek Stoa*, Oxford, 1976, p. 123.

図版出典

図9: R. Ginouvès, *L'Architecture Grecaue et Romanie II*, Roma and Athens, 1992, pl. 53-8.

図10: J. Travlos, *Bildlexikon zur Topographie des Antiken Athen*, Tübingen, 1971, pl. 477.

図11: E. Fiechter, *Das Dionysos-Theater in Athen I. Die Ruine*, Stuttgart 1935, Abb. 14.

1) 熊本大学大学院先導機構 特任助教 博士(工学)
2) 熊本大学自然科学研究科 教授 工博
3) 熊本大学大学院自然科学研究科 博士前期課程

Assist. Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
Postgraduate Student, Kumamoto University